法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-10-06

能界展望(平成二十二年)

Ishii, Tomoko / 石井, 倫子

(出版者 / Publisher)
法政大学能楽研究所 / The Nogami Memorial Noh Theatre Research Institute of Hosei University
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
能楽研究 / 能楽研究
(巻 / Volume)
37
(開始ページ / Start Page)
193
(終了ページ / End Page)
207
(発行年 / Year)
2013-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00008780

Hosei University Repository

能界展望（平成二十二年）

石井倫子

はじめに

本年は能界にとってまさに激動の一年、逆風が吹き荒れた一年といえるだろう。

多くの貴重な人材を失った一年でもあった。ワキ方福王流の村瀬純氏、シテ方観世流・関根祥人氏のあまりにも早すぎる逝去は激しい衝撃をもたらしたが、同じく観世流の河村貞二氏・山中雷三氏・片山慶次郎氏・泉泰孝氏・若松健史氏、宝生流の宝生英照氏・寺井良雄氏、金春流の金春信高氏、狂言方大蔵流の茂山千之丞氏、和泉流の野村万之介氏らが相次いで鬼籍に入られ、シテ方金春流の仙田理芳氏、小鼓方大倉流の寺島澄代氏・川越治子氏といった女性能楽師の活動を牽引してきた方々の訃報にも接した。能楽師ばかりではない。本研究所の所長を長く務められた能楽研究者の表章氏、能面研究者の後藤淑氏、能楽評論家の大河内俊輝氏、免疫学者で能作者でもあった多田富雄氏など、長年にわたって能楽の啓蒙と普及に貢献してこられた先達をも喪った。改めて、一つの時代の終焉を思わずにはいられない。

政権交代後の目玉ともいうべき行政刷新会議の事業仕分けが各方面に大きな衝撃を与えたことは記憶に新しい。独立行政法人日本芸術文化振興会もその対象となり、芸術創造・地域文化振興事業、子どものための優れた舞台芸術体験事業、芸術文化振興基金事業などが大幅に予算縮減された。平成14年度に文科省によって「子どもたちが本物の舞台芸術や伝統文化に触れ、豊かな感性と創造性を育む」ことを目的として開始され、全国の小中学校において優れた舞台芸術や伝統芸能の鑑賞の機会を提供してきた「子どものための優れた舞台芸術体験事業」も、「国が子どものためだけに事業をすることは必然性に欠ける。中心は地域での取り組み」（評価者コメント）とばっさり切り捨てられてしまった。能楽が歌舞伎・人形浄瑠璃文楽とともに平成20年にユネスコ無形文化遺産として登録されたことは周知の通りだが、日本政府はこれらの文化遺産を保護する義務をみずから放棄したわけである。

文化芸術軽視を明確に打ち出した政府の姿勢に危機感を持った多くの関係者が一斉に声を上げ、芸団協は文化予算の増額を求める「もっと文化を！」キャンペーンを実施し、実

Hosei University Repository

演家・関係団体・企業そして広く一般へ国会請願のための署名を募って、約60万人からの署名とともに、「文化芸術立国に向けて文化関連予算の大幅な増額等を求める請願」を提出した。こうした事態が続けば我が国の文化破壊につながりかねないとして、文化庁も検討会「論点整理～「国の顔」である国立文化施設等の危機的状況を打破するために～」を発足させ、12月には提言をまとめている。観阿弥・世阿弥が足利義満の後援を得て以来、能楽は時の為政者と関わりを持ちながら発展を続けてきた。岩倉具視が久米邦武の助力を得て能楽復興に尽力したこと、明治政府の要人や華族らが能を後援していたことなどに思いを馳せると、隔世の感を禁じ得ない。

第二次世界大戦後間もない昭和20年9月に社団法人として設立された社団法人能楽協会が、平成20年12月の公益法人制度改革関連三法の施行を受けて公益社団法人の認定を受けたことも、特筆すべき出来事である。同協会は「我が国を代表する古典芸能である能楽の伝統と秩序を維持し、この芸能を存続するための人材を養成し、会員能楽師の交流と研修の実施による教養の向上及び能楽に関する技芸錬磨を図り、その成果を公表して一般の能楽観賞に資し、またその知識を高めることで、能楽の振興を図るとともに、会員能楽師の芸能活動の推進、活動条件の改善及び地位の向上に努め、合わせてその実演に係る権利擁護とともに能楽実演データを正しく保存し、もって我が国の文化芸術の発展に寄与することを目的とする」(定款第三条)ものであり、公益目的事業として

(1) 伝統的な能楽の振興をはかるための活動

(2) 能楽及び能楽界の発展をはかるための活動

の二点を掲げている。

公益社団法人への移行に際して、能楽協会では大幅な役員改選を行い、実務的な組織体制を強化した。協会関係者によって能楽への理解や後援を得るための営業活動が幅広く行われているとも聞く。演者がこのようなことまでしなくてはならないのかという思いがないわけでもないが、もはや能楽が「伝統」という言葉の上に胡座を掻いていられるような状況にないことは誰の目にも明らかであろう。能・狂言の公演数は一昔前と比較すると格段に増えており、毎日どこかしらで公演が行われているといっても過言ではないが、実際のところ、集客に苦労している公演が大多数である。そしてまた、後継者問題、観客の高齢化・稽古人口の減少問題など、能界は実に多くの根深い課題を抱えている。十年後、そして二十年後、能界はどうなっていくのか。能楽に携わるさまざまな立場の人間がこの危機意識を共有し、能楽の将来のために何ができるかを模索し、行動を起こすことが強く求められている。

例年と同様、本稿ではすべての催しを取り上げることは叶わなかった。また、敬称を一部省略させていただいている。併せてご容赦願いたい。

Hosei University Repository

さまざまな催し

【記念能・追善能】

能楽堂や演能団体が節目の年を迎えることを記念した公演や追善の会が多いことが本年の特徴であった。以下に主な公演を開催順に列挙する。

◎上田照也二十七回忌追善会

1月11日。上田能楽堂。〈木曽〉上田拓司、〈魚説経〉善竹忠一郎、〈砧〉上田貴弘ほか。

◎林吉兵衛襲名披露能

1月31日。京都観世会館。〈乱　双之舞・置壺〉金剛永謹、〈屋島　弓流・素働・奈須与市語〉片山清司、〈蝸牛〉茂山千五郎、半能〈石橋　大獅子〉大江又三郎ほか。

◎第二十四世宗家大蔵弥右衛門七回忌追善　大蔵会

2月14日。国立能楽堂。〈二千石〉大蔵弥太郎、〈膏薬練〉大蔵教義、〈花子〉大蔵千太郎、〈宗論〉善竹長徳、〈煎物〉大蔵吉次郎ほか。

◎第五十回記念式能

2月21日。国立能楽堂。昭和20年に設立した社団法人能楽協会初の公演として30年に行われ、以降毎年シテ方・狂言方全流儀が揃っての翁付五番立てにより開催されてきた式能が、五十回を迎えた記念の公演。第一部〈翁〉金春安明、〈竹生島〉金春欣三、〈福の神〉三宅右近、〈俊成忠度〉大坪喜美雄、〈蝸牛〉茂山千五郎。第二部〈雪　雪踏拍子〉金剛永謹、〈見物左衛門〉野村萬、〈自然居士〉粟谷能夫、〈千鳥〉山本東次郎、半能〈石橋　大獅子〉梅若玄祥ほか。

◎観世九皐会百周年記念特別公演・先代二世観世喜之三十三回忌追善

観世九皐会は平成20年から三年にわたり記念公演を行っている。同会百周年の詳細は第三十四号・三十五号のの「能界展望」（平成二十年・平成二十一年）に詳しいので、そちらを参照されたい。本稿では今年度の主な催しを列記しておく。2月28日。矢来能楽堂。〈翁〉長沼範夫、〈鍋八撥〉野村万作、〈玄象〉鈴木敬吾ほか。4月25日。国立能楽堂。〈三山〉観世喜正、〈泣尼〉山本東次郎、〈関寺小町〉観世喜之ほか。5月22日。大槻能楽堂。〈定家〉塩谷恵、〈魚説法〉茂山七五三、〈邯鄲〉長山耕三ほか。7月25日。矢来能楽堂。〈井筒〉長山耕三、〈悪太郎〉三宅右近、〈山姥〉遠藤喜久。10月2日。名古屋能楽堂。〈杜若　恋之舞〉髙橋暸一、〈栗焼〉佐藤融、〈安宅　勧進帳・瀧流〉駒瀬直也。10月24日。矢来能楽堂。〈花筐〉奥川恒治、〈萩大名〉野村萬、〈融　毳〉小島英明ほか。

◎吉浪準一二十七回忌追善　吉浪壽晃　能の会

3月21日。京都観世会館。〈隅田川〉吉浪壽晃ほか。

◎谷本健吾煌ノ会　谷本正鉦十七回忌追善

5月22日。宝生能楽堂。〈通盛〉観世銕之丞、〈二千石〉山本東次郎、〈道成寺〉谷本健吾ほか。

◎山本能楽堂再建六十周年記念公演　たにまち能

5月29日。山本能楽堂。昭和2年に山本博之によって建立さ

Hosei University Repository

れた山本能楽堂は20年に大阪大空襲で焼失したが、25年に再建され、この年六十周年を迎えた。これを記念しての公演。〈隅田川〉山本章弘、〈空腕〉小笠原匡、半能〈石橋　大獅子〉梅若玄祥ほか。

◎銕仙会特別公演　観世寿夫三十三回忌・観世雅雪二十三回忌追善能

6月27日。宝生能楽堂。〈砧〉観世銕之丞、〈川上〉野村万作、半能〈石橋〉観世淳夫ほか。

◎第四十回記念公演　堺市民能

7月17日。堺市民会館。昭和45年、大阪万博を記念し長山禮三郎らが中心となって「堺薪能」を開催し、六回目の51年からは堺市民会館に会場を移し、名称も「堺市民能」と改められて毎年開催されている。〈翁〉観世銕之丞、〈羽衣　彩色之伝〉長山禮三郎、〈鎌腹〉茂山七五三、〈猩々乱　置壺〉大槻文蔵ほか。

◎第三十回記念　大阪城薪能

8月25日。大阪城西の丸庭園。〈翁〉観世清和、〈貫茵〉善竹忠一郎、〈安宅　勧進帳・延年之舞〉梅若玄祥ほか。

◎上野朝太郎二十七回忌追善能

9月23日。大阪能楽会館。〈安宅　勧進帳・瀧流之伝〉上野雄三、〈惣八〉善竹忠一郎、〈卒都婆小町　一度之次第〉上野朝義、〈恋重荷〉観世清和ほか。

◎六世大江又三郎三十三回忌追善別会能

10月10日。大江能楽堂。〈鸚鵡小町　杖三段之舞〉大江又三郎、〈呂蓮〉茂山千之丞、〈乱〉大江広祐ほか。

◎先代宗家金剛巌十三回忌追善能

10月24日。金剛能楽堂。〈定家〉金剛永謹、〈悪坊〉茂山千五郎、〈道成寺〉金剛龍謹ほか。

◎吉井司郎五十年祭追善能

10月30日。大阪能楽会館。〈翁〉吉井基晴、〈二千石〉茂山千五郎、〈三輪　誓納〉観世清和ほか。

◎萬狂言　八世万蔵七回忌・六世万蔵三十三回忌追善公演

10月31日。国立能楽堂。〈宗論〉野村萬、〈釣狐〉野村万蔵ほか。

◎久田秀雄二十七回忌追善　久田勘鬼の会

11月23日。名古屋能楽堂。〈花月〉久田勘吉郎、〈魚説法〉井上靖浩、〈木曽　願書・恐之舞〉久田勘鬼ほか。

◎五十五世梅若六郎・梅若雅俊・梅若恭行追善会／梅若晋矢改メ二代梅若紀彰・梅若靖記改メ梅若長左衛門襲名披露

12月10日。国立能楽堂。舞囃子八番・仕舞九番・連吟一番の上演。梅若玄祥、梅若万三郎、梅若紀彰、梅若長左衛門ほか。

◎藤田大五郎三回忌　偲ぶ会

12月22日。国立能楽堂。〈清経　恋之音取〉野村四郎ほか、舞囃子七番・仕舞四番・連吟一番・一調一管一番・一調三番の上演。

◎大分市平和市民公園能楽堂二十周年記念大会

12月23日。大分市平和市民公園能楽堂。〈鸚鵡小町　杖三段之舞〉谷村育子、〈蝸牛〉野村万蔵、〈恋重荷〉観世清和ほか。

Hosei University Repository

【普及公演】

近年、能・狂言の普及・啓蒙活動のため、あるいは能・狂言の新たな可能性を探るために結成される演能団体は枚挙に暇ない。諸般の事情によって惜しまれながら幕引きをする公演がある一方、新しい試みの公演が立ち上がる年でもあった。主なものを以下に挙げる。

◎鳳の会最終公演

1月17日。名古屋能楽堂。〈宗論〉佐藤友彦、〈素袍落〉佐藤友彦、〈棒縛〉佐藤友彦ほか。林和利（名古屋女子大学教授）・井上菊次郎・佐藤友彦を同人として平成4年に結成し、以来毎年三回の公演を、15年からは公開講座も開催してきた「鳳の会」が、井上菊次郎の病気療養のため、第五十三回の本公演をもって最終公演となった。

◎第一回名古屋片山能

3月13日。半能〈石橋　大獅子〉梅田邦久、〈船弁慶　重前後之替〉片山清司ほか。名古屋で片山家の能を観たいという多くの要望に応えて発足した会。この時以来、年二回のペースで開催されている。

◎第一回「萬歳楽座」公演

3月26日。国立能楽堂。舞囃子〈智恵子抄〉片山清司、素囃子〈道成寺組曲〉藤田六郎兵衛、能〈土蜘蛛〉観世清和ほか。笛方藤田六郎兵衛が主催する新しい観能の会。笛方ならではの囃子にこだわった番組作りによって、能の魅力を「音」というテーマから伝える。

◎第十三回能楽現在形千秋楽

8月10日。国立能楽堂。〈野宮　干之掛〉片山清司、〈越後聟〉野村萬斎ほか。能楽の総合芸術としての可能性を探求すべく、狂言の野村萬斎、笛の一噌幸弘、大鼓の亀井広忠が平成18年に発足した「幸弘☆萬斎☆広忠☆能楽現在形」が、本公演をもって能楽堂での公演を終了した。なお、世田谷パブリックシアターを会場とする「能楽現在形　劇場版@世田谷」は12月17・18両日に開催された。

【復曲・新作など】

本年もさまざまな復曲や新作の公演があったが、国立能楽堂がかなり意欲的にこういった企画に取り組んでいることは注目される。〈丹後物狂〉〈重衡〉ほか復曲の再演も多かった。一度廃絶した曲を現代に甦らせる、あるいは一から能を作り上げる―このような作業を通じて新たな能の可能性を探ることには大きな意義があると思うが、残念ながら、初演のみ、もしくは一～二度程度の再演で終わってしまう作品も少なくない。ただむやみに「新しさ」を追い求めるだけではなく、再演に耐える作品を創り出すことこそが重要なのではないか。以下に主な公演のみを挙げる。

◎演出再検討による〈恋重荷〉

1月30日。大槻能楽堂。大槻文蔵、村上湛両氏が現行本をもとに、妙佐本や元頼本などを勘案し、新たに〈恋重荷〉の演出を再検討したもの。出演は大槻文蔵、上田拓司、福王知登、

Hosei University Repository

善竹忠重、野口傳之輔、曽和正博、河村大、前川光長ほか。『能楽タイムズ』三月号に村上湛氏による「大槻能楽堂〈恋重荷〉構成・再演出報告」が載る。

◎研究公演〈鐘巻〉

2月13日。大槻能楽堂。〈道成寺〉の原型である〈鐘巻〉は一九九二年に法政大学能楽研究所が復曲した後、六回上演されている。今回は三度の上演歴を持つ大槻文蔵氏がその経験を踏まえ、天野文雄氏と共に大幅に演出を改め、「元禄本」に基づいた原型の復元を試みた。『能楽タイムズ』四月号には、澤木雅輝氏による「復活『鐘巻』の成果」が載る。出演は、赤松禎英・福王和幸・福王知登・喜多雅人・茂山千之丞・茂山茂・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・山本哲也・上田悟ほか。

◎参考曲〈白髭〉

3月22日。塩津哲生の會特別公演。喜多能楽堂。喜多流では参考曲の扱いとなっており、長らく上演されることのなかった〈白髭〉を上演。出演は、塩津哲生・井上真也・佐々木多聞・長島茂・宝生欣哉・大日方寛・御厨誠吾・山本東次郎・山本則孝・加藤孝典・荒井豪・水木武郎・山本凛太郎・山本則重ほか。

◎新作能〈野馬台の詩〉

3月24日・25日。国立能楽堂。廃曲「吉備」を現代に蘇らせた作品。『吉備大臣入唐絵詞』に取材しており、幽閉された吉備真備の前に、唐土で没して鬼となった阿倍仲麻呂が現れ、唐の皇帝から課される試練を教える。真備は仲麻呂の手助けでさまざまの難問を切り抜けるが、皇帝の前に召し出され、日本の未来を予言した「野馬台詩」を音読するよう命じられるという筋立て。能・狂言の新たな可能性を模索した作品。小田幸子脚本、梅若六郎（玄祥）演出・節付。出演は野村萬斎・梅若玄祥・野村万作・野村裕基・石田幸雄・深田博治・高野和憲・月崎晴夫・竹山悠樹・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・亀井広忠・助川治ほか。

◎復曲　狂言〈浦島〉・能〈丹後物狂〉

4月29日。国立能楽堂企画公演。丹後半島を舞台とする狂言と能とを一番ずつ上演。復曲狂言〈浦島〉は、浦島という名の老人が助けた亀に玉手箱をもらうという筋立てだが、我々がよく知っている昔話とは展開・結末ともに異なる。出演は野村小三郎・野村信朗・松田高義ほか。復曲能〈丹後物狂〉は井阿弥の原作を世阿弥が大幅に改作したことが知られる親子物狂能。本曲は昭和61年橋の会によって復活上演されて以来何度か再演されているが、今回は平成21年に物語の舞台となる天橋立・文殊堂で上演された形での再演。観世清和節付・型付、松岡心平監修。出演は観世清和・観世三郎太・福王和幸・永留浩史・喜多雅人・山本東次郎・山本則重・杉信太郎・鵜澤洋太郎・亀井広忠ほか。

◎復曲能〈重衡〉

5月27日。国立能楽堂企画公演。昭和58年に『橋の会』がシテ浅見真州で復活上演した修羅能〈重衡〉の再演。父・清盛の命により南都焼き討ちという重罪を一身に背負うこととなっ

Hosei University Repository

た重衡の苦悩を描き出す。蝋燭能として上演。出演は観世銕之丞・宝生閑・野村萬斎・藤田六郎兵衛・大倉源次郎・國川純ほか。

◎復曲能〈松山天狗〉

7月23日。国立能楽堂。神遊第四十一回公演。保元の乱で敗れ流罪となり、配流先の讃岐で憤死した崇徳上皇が天狗となって西行の前に姿を現すという物語。金剛流の現行曲とは別に、平成6年に『能劇の座』によって復曲された。今回は蝋燭能による上演。監修・観世銕之丞、能本作成・西野春雄、節付・梅若六郎。出演は観世喜正・殿田謙吉・山本泰太郎・一噌隆之・観世新九郎・柿原弘和・観世元伯ほか。

◎新作能〈兼続〉

11月5日。宝生能楽堂。舞台藝術プロジェクト第一回自主公演。平成20年に初演された本曲の上演十回目を記念したもの。本作については『観世』平成22年10月号に紹介記事が、『能楽タイムズ』同年7月号に作者の高井松男氏と中村雅之氏の対談がある。高井松男作、飯田清一作調、観世喜正節付・型付。出演は観世喜正・坂真太郎・高井松男・則久英志・御厨誠吾・山本則重・松田弘之・飯田清一・柿原光博・小寺真佐人ほか。

◎新作能〈リア王〉

12月23日。紀尾井ホール。『花の座』公演。シェイクスピアの『リア王』最終幕を複式無限能に構成した新作能で、平成19年の初演以来、今回で四度目の上演となる。リア王の苦悩を描きながら、主人公をリア王ではなく三女コーディーリアとし、その孝心と女性の美徳をテーマとした。上田邦義作・演出、足立禮子・鈴木敬吾作補。出演は足立禮子・遠藤喜久・新井麻衣子・遠藤博義・寺井久八郎・古賀裕巳・大倉正之助・徳田宗久ほか。

◎現代能〈光の素足〉

12月26日。国立能楽堂。中所宣夫能の会　現代能公演。宮沢賢治の童話「ひかりの素足」を題材にに、その後日譚を能に創作したもの。出演は中所宣夫・中所真吾・山本則重・山本則秀・松田弘之・田邉恭資・亀井広忠ほか。

【海外との交流・海外公演など】

◎スペイン・ポルトガル能楽公演

4月14日～23日。国際交流基金(ジャパンファウンデーション)が、二〇〇九年度に開設されたマドリード日本文化センターのオープニング記念事業の一環として、スペイン二都市(マドリード、バルセロナ)で開催した能楽公演。あわせて「日本・ポルトガル修好150周年」のオープニング事業としてリスボンでも公演を行った。

狂言「寝音曲」・能「雪　雪踏拍子」と狂言「因幡堂」・能「巻絹」の上演で、団長・松野恭憲、芸術顧問・金剛永謹団員・種田道一、廣田幸稔、廣田泰能、豊嶋幸洋、金剛龍謹、今井克紀、豊嶋晃嗣、宇高竜成、宇高徳成、江崎敬三、福王知登、左鴻泰弘、荒木建作、守家由調、上田慎也、善竹忠重、

Hosei University Repository

善竹忠亮、岡村和彦。

◎りんぷうの会、デンマーク能楽写真展

10月12日～11月5日。在デンマーク日本大使館からの要請をうけ、能楽の普及とそのための撮影会を主催している「りんぷうの会」により、コペンハーゲンにて能楽の伝統を紹介する写真展と講座「七百年を生きる能楽の世界」（講師：神田佳明）が開催された。写真展、講座そして能面の撮影会も盛況であった。

【講座・展覧会など】

◎「京都国立博物館所蔵能装束展」金沢能楽美術館

4月17日～5月30日。加賀前田範旧蔵品の能装束や、金沢伝来の能面、その他京都国立博物館蔵の代表的な能装束を展示。

◎「国立能楽堂開場二十五周年　国立能楽堂コレクション展能の雅（エレガンス）狂言の妙（エスプリ）」

国立能楽堂開場二十五周年を記念して平成20年4月から各地を巡業した特別展は、この年、山形そして東京への里帰りで幕を下ろした。国立能楽堂が開館以来収集してきた能面・能装束をはじめとするさまざまな美術品や資料が地方で巡業展示されたのは今回が初めてである。能・狂言の普及のためにも、このような試みは今後さらに広がっていくことが期待される。

①4月17日～5月23日。伝国の杜米沢市上杉博物館。②6月12日～7月25日。サントリー美術館。

◎第九回能楽学会大会「能・狂言面研究の現在と未来」

5月15日・16日。早稲田大学小野記念講堂。初日は研究発表二本と恩賜賞・日本学士院賞受賞記念講演「八人の先達と私」表章。二日目は研究発表三本と講演「能面らしい能面の形成と伝承作家の問題」田邊三郎助、「面に刻まれた能の歴史」大谷節子、対談「演者と面」観世銕之丞、山本東次郎、パネルディスカッション。

◎早稲田大学演劇博物館「川崎九淵五十回忌記念展　よみがえる名人の芸～愛蔵の鼓胴を中心に～」

5月22日～8月2日。明治・大正・昭和にわたって抜群の技量と芸に対する厳しい姿勢から多くの能楽ファンを魅了した葛野流大鼓方川崎九淵（一八七四～一九六一）の五十回忌を記念して、平成21年に同館蔵となった九淵ゆかりの品々を展示。6月23日には関連演劇講座として近藤乾之助、金春惣右衛門、羽田昶による鼎談も開催された。

郎、大川典良ほか。

◎シルク博物館「華麗なる能装束　稔りの季」

6月1日～8月29日。江戸期の能装束を復原した山口能装束研究所の能装束の中から、日本の四季折々の植物意匠作品を中心に華麗な能装束45点を一堂に展示紹介する。

◎根津美術館「能面の心・装束の華」

6月5日～7月4日。室町時代から江戸時代の男、女、鬼、妖精の能面とそれぞれの面にあった能装束約三十点の展観。

◎武蔵野大学能楽資料センター公開講座「能の大曲・秘曲」

Hosei University Repository

①6月17日羽田昶「披くということ―能の大曲・秘曲を演じる意味」②7月1日聞き手：リチャード・エマート「シテ方喜多流・大島政允氏に聞く」③9月30日聞き手：三浦裕子「太鼓方観世流・観世元伯氏に聞く」④10月7日聞き手：西哲生「シテ方観世流・関根祥六氏に聞く」

◎国際シンポジウム「観世寿夫とは何だったのか」

9月27日。早稲田大学小野記念講堂。〈第一部〉討議「伝統演劇の挑戦」野村万作、シェリー・フェノ・クイン、竹本幹夫、司会・岡本章。〈第二部〉記録映像上映『演劇作業の根拠』（一九七七年、著作権：日仏演劇協会）ジャン＝ルイ・バロー、観世寿夫出演。講演「観世寿夫の芸」横道萬里雄。〈第三部〉討議「観世寿夫と現代」渡邊守章、湯浅譲二、岡本章、司会・竹本幹夫。

◎国立能楽堂特別展示「能面に見る女性表現―女面の成立と変遷―」

10月6日～11月21日。国立能楽堂資料展示室。正応4年（一二九一）から寛政12年（一八〇〇）までの国指定重要文化財四面を含む約五〇面を展示し、女面の成立と表現の変遷、そして多様化や定型化の歴史を考える。

◎第十五回法政大学能楽セミナー「能の因数分解」

①10月12日石井倫子「本説の種―能の台本はどのように作られるのか―」②10月19日味方健「「形鬼心人　女体の霊の風体―風体を作り出す謡・囃子・型―」③11月9日山中玲子「文字にあたる風情―能の所作の特徴を考える―」④11月16日伊海孝充「見所より見る所の風姿―面・装束・舞台から考える能の姿―」⑤11月27日宮本圭造「あまねく万人の感聞の褒美する所―能の興行が成立するまで―」

◎金沢能楽美術館　新・古能面展「現代能面美術展」

11月9日～12月12日。加賀宝生に伝えられた江戸時代までの能面と、全国から寄せられた現代能面美術展の入賞作品とが一堂に会する。

◎清雪忌

12月7日。銕仙会能楽研修所。観世寿夫三回忌を機に始まり、長らく中断されていた清雪忌が再開の運びとなった。観世寿夫「井筒」一部上映、鼎談「観世寿夫さんから受けた教え」野村四郎・山本順之・浅見真州、「観世寿夫にとっての世阿弥」竹本幹夫など。

◎東京文化財研究所公開学術講座　金沢大学連携融合事業・日中無形文化遺産プロジェクト公開講座「「和泉流狂言の伝承」―金沢と名古屋―」

12月12日。石川県立能楽堂。東京文化財研究所無形文化遺産部と金沢大学との連携融合事業で、金沢ゆかりの和泉流狂言を取り上げ、金沢と名古屋との技法の比較を通じて伝承を考察した。講演「和泉流狂言史の金沢と名古屋」西村聡、講演「和泉流：狂言小舞の音楽」高桑いづみ、実演「小舞の比較（金沢と名古屋）：「海道下り」「石河蕗五郎」「鐘の音」」、実演「狂言の比較（金沢と名古屋）：「棒縛」」

Hosei University Repository

襲名・改名など

小鼓方幸流の林光壽氏は1月1日をもって家名吉兵衛を襲名し、襲名披露能が1月31日、京都観世会館で行われた。

シテ方観世流の梅若晋矢氏ならびに梅若靖記氏は12月10日をもって、梅若紀彰、梅若長左衛門を襲名し、梅若晋矢改メ二代梅若紀彰・梅若靖記改メ梅若長左衛門襲名披露能が国立能楽堂で行われた。

栄誉・受賞

◎日本学士院賞・恩賜賞(平成22年度)　法政大学名誉教授　表章

受賞理由「表 章氏は、法政大学能楽研究所に四十五年間勤務し、わが国の古典演劇として世界においても注目されている能楽の研究に従事してきた。これまでにも多くの成果を挙げてきたが、今回の『大和猿学史参究』(岩波書店、二〇〇五年三月)及び『観世流史参究』(檜書店、二〇〇八年二月)において、能楽史に関する従来の見方を全く改めねばならない新見を提示し、現代に至る能楽の展開を詳細に跡付けた。これまで、観阿弥や世阿弥に代表される「大夫」は大和猿楽の座の統率者と考えられていたが、表氏は、座の本来の統率者は「翁(おきな)」を舞う「長(おさ)」であり、「大夫」の率いる集団とは別の組織だったのが、「大夫」は次第に演劇面で「長」の組織を圧倒して座の中心となっていった過程を、資料の綿密な分析によって明らかにした。さらに、現今の能楽五流において最大の流派である観世流に関して、観阿弥の出身地や観世信光の生年など、多くの伝記的新事実を指摘し、観世座がそれぞれの時代とどう関わってきたか、その実態を具体的に解明した。表氏の以上の研究は、今後の能楽研究の指針となる業績として高く評価される。」

◎春の褒章(4月29日)　シテ方観世流　坂井音重

旭日双光章

◎秋の褒章(11月3日)　シテ方観世流　関根祥六

旭日小綬章

◎文化庁芸術祭賞優秀賞(演劇部門)

狂言方大蔵流　山本泰太郎(第29回花影会における狂言「月見座頭」の演技に対して)

受賞理由「人生の深淵を穿つ名作「月見座頭」。閉眼の泰太郎が劇中の小舞「弱法師」で見せた、ワキ柱の寸前まで突進し長袴の裾軽々と舞台際に舞い込む鮮技は、たゆまぬ稽古の末に体得した自在の手練であって、老巧・山本東次郎のアドに伍する熱演が首尾一貫。他者の理解を超えた盲人の孤心と詩心を示し、絶大な感動を与えた。」

大蔵流狂言・善竹会(「平成22年度善竹狂言会」の成果に対して)

受賞理由「大曲『釣狐』を中心とした、工夫を凝らした演目構成で、狂言会が陥りがちな単調さを克服し、狂言特有のく

Hosei University Repository

つろいだ時空を現出。「釣狐」は珍しい「老狐」の小書で、シテの善竹忠一郎が善竹十郎の狐師を相手に同曲の本来の面白さを出して好演。「昆布売」「六地蔵」とあわせ、善竹会の幅と将来性を感じさせる会であった。」

◎名古屋市芸術奨励賞（平成21年度）　能楽の友社
◎京都府文化賞特別功労賞　シテ方金剛流　廣田陞一
◎京都府芸術新人賞　小鼓方幸流　曽和尚靖
◎京都市文化功労者　シテ方金剛流　金剛永謹
◎エクソンモービル音楽賞　シテ方宝生流　近藤乾之助
◎第32回観世寿夫記念法政大学能楽賞（第三十六号彙報参照）
シテ方宝生流　大坪喜美雄
能楽研究者　岩崎雅彦
◎第21回催花賞（第三十六号彙報参照）　扇制作者　福井四郎

日本能楽会・能楽協会関係

◎日本能楽会

【役員構成】

〈会長〉野村四郎

〈常務理事〉観世清和・金春安明・亀井保雄・金剛永謹・宝生閑・柿原崇志・山本東次郎・野村万作

〈理事〉浅見真州・梅若吉之丞・梅若玄祥・金井雄資・豊嶋三千春・喜多六平太・粟谷能夫・高安勝久・杉市和・観世新九郎・荒木賀光・金春惣右衛門・茂山千五郎

〈監事〉櫻間金記・小林与志郎

【会員数】（平成22年度末）総数　450名

シテ　観世187　金春15　宝生48　金剛13　喜多25　小計288
ワキ　高安4　福王5　宝生9　小計18
笛　一噌6　森田21　藤田2　小計29
小鼓　幸13　幸清7　大倉7　観世2　小計29
大鼓　葛野6　高安8　大倉8　石井6　観世1　小計29
太鼓　観世7　金春11　小計18
狂言　大蔵24　和泉15　小計39

◎能楽協会

【役員構成】

〈理事長〉野村萬

〈副理事長〉福王茂十郎

〈専務理事〉本田光洋

〈常務理事〉香川靖嗣、武田宗和、前田晴啓、上田貴弘、観世元伯

〈理事〉浅井文義、一噌隆之、井上裕久、大倉源次郎、金井雄資、観世銕之丞、観世喜正、國川純、善竹十郎、辰巳満次郎、種田道一、成田達志、森常好

〈顧問〉観世清和、金剛永謹

〈監事〉秋元実、大塚和成、中村元彦

【会員数】1,346名

シテ観世468　金春111　宝生234　金剛85　喜多45
ワキ高安14　福王18　宝生25

Hosei University Repository

笛　一噌13　森田46　藤田4
小鼓幸30　幸清10　大倉18　観世6
大鼓葛野12　高安11　大倉11　石井10　観世2
太鼓観世16　金春22
狂言大蔵79　和泉56

物故者

●後藤淑
民俗芸能、中世芸能研究者。昭和女子大学名誉教授。1月8日、逝去。享年85。大正13年9月26日生まれ。早稲田大学演劇博物館学芸員、昭和女子大学大学院教授を務め、文化庁はじめ神奈川県・川崎市等の文化財保護審議会委員長等を歴任。長年にわたし、国内外の仮面の調査研究及び民俗芸能の保存・育成に寄与した。能面に関する調査研究も多く、関連著書に『能面史研究序説』『能楽の起源』『中世仮面の歴史的・民俗学的研究—能楽史に関連して』など。

●村瀬純
ワキ方福王流。1月9日、冠状動脈梗塞のため逝去。享年59。昭和25年7月19日、村瀬登茂三の長男として生まれる。父及び岡久雄〈シテ方観世流〉に師事。関東のワキ方福王流として第一線の舞台で活躍し、多数の海外公演にも出演した。

●寺島澄代
小鼓方大倉流。1月10日、消化管出血のため逝去。享年92。大正6年2月8日生まれ。故・中原孝一に師事。女流能楽師の先駆けとして活躍。

●仙田理芳
シテ方金春流。3月5日、大腸がんのため逝去。享年71。昭和13年8月6日生まれ。金春信高に師事。36年、初シテ〈舟弁慶〉。37年、女性の演能団体『朋春会』を結成、第一回公演で〈巴〉を演じる。42年〈乱〉、52年〈石橋〉、56年〈道成寺〉を披く。『理春会』主宰。(社)金春円満井会理事。

●河村禎二
シテ方観世流。3月13日、心不全のため逝去。享年86。大正12年4月22日、河村北星の次男として生まれる。父及び十二世林喜右衛門に師事。昭和2年初舞台。〈石橋〉〈乱〉〈道成寺〉〈翁〉〈清経　恋之音取〉〈隅田川〉〈砧〉〈望月〉〈求塚〉〈恋重荷〉〈卒都婆小町〉〈鸚鵡小町〉〈鷺〉〈姨捨〉などを披く。31年、河村能舞台を設立。京都観世会、能楽協会京都支部、京都能楽会の要職を歴任。京都府文化功労賞などを受賞。重要無形文化財保持者(総合認定)。

●山中雷三
シテ方観世流。3月30日、逝去。享年73。昭和11年12月18日、山中信義の三男として生まれる。父及び生一佐兵衛、観世元昭に師事。16年、5歳で初舞台。〈道成寺〉〈翁〉〈望月〉〈卒都婆小町〉〈姨捨〉などを披く。60年に山中能舞台を設立。45年、〈砧〉で大阪文化祭賞。平成8年、知事表彰。

●川越治子
小鼓方大倉流。4月11日、肺炎のため逝去。享年95。大正3

Hosei University Repository

年5月11日生まれ。大倉長十郎に師事。〈道成寺〉〈鷺〉〈姨捨〉〈定家〉〈卒都婆小町〉〈鸚鵡小町〉などを披く。女流能楽師の先駆けとして活躍し、85歳で引退後も「川越治子能楽振興基金」を設立するなど、神戸での能楽普及に尽力した。

●宝生英照

シテ方宝生流十九世宗家。4月17日、心不全のため逝去。享年52。昭和33年2月9日、十八世宗家宝生英雄の長男として生まれる。38年、5歳で初舞台。45年、初シテ〈岩船〉、以後〈鷺〉〈石橋　連獅子〉〈道成寺〉〈乱　膝行〉〈翁〉などを披く。平成7年、宝生流宗家を継承。東京芸術大学邦楽科講師、日本能楽会常務理事、宝生会会長などを歴任。

●多田富雄

文筆家。免疫学者。東京大学名誉教授。4月21日、前立腺がんのため逝去。享年76。昭和9年3月31日、茨城県結城市に生まれる。千葉大学医学部卒業。千葉大学医学部第二病理学教室に勤務、のち教授、東京大学医学部教授、東京理科大学生命科学研究所所長などを歴任。免疫学者として優れた業績を残す。野口英世記念医学賞、朝日賞、文化功労者などを受賞。平成21年、瑞宝重光章。『免疫の意味論』で大佛次郎賞、『独酌余滴』で日本エッセイスト・クラブ賞、『寡黙なる巨人』で小林秀雄賞を受賞。〈無明の井〉〈望恨歌〉〈一石仙人〉〈原爆忌〉〈長崎の聖母〉など多くの新作能の作者としても知られる。

●山本則直

狂言方大蔵流。4月23日、肝不全のため逝去。享年71。昭和14年2月23日、故三世山本東次郎の次男として生まれる。父に師事。19年〈伊呂波〉で初舞台。16歳で〈三番三〉、19歳で〈釣狐〉を披く。39、40年、芸術祭奨励賞。51年、芸術選奨新人賞。財団法人杉並能楽堂理事。平成16年度、観世寿夫記念法政大学能楽賞。18年、芸術選奨文部科学大臣賞。同年、紫綬褒章受章。

●関根祥人

シテ方観世流。6月22日、急性大動脈解離のため逝去。享年50。昭和34年7月10日、関根祥六の長男として生まれる。父及び二十五世観世左近、二十六世観世清和に師事。36年初舞台。44年〈経正〉で初シテ。以後〈翁〉〈砧〉〈求塚〉〈正尊〉などを披く。平成10年〈道成寺〉で文化庁芸術祭新人賞。17年、松尾芸能賞優秀賞。海外公演にも多数参加。能楽協会常務理事、観世会理事などを歴任。

●金春信高

シテ方金春流七十九世宗家。8月7日、パーキンソン症候群のため逝去。享年90。大正9年4月12日、七十八世宗家・故金春光太郎（八条）の長男として生まれる。父に師事。昭和2年〈車僧〉のシテで初舞台。関西大学専門部国漢学科卒業。26年、宗家を継承。謡本の改訂に尽力。他流にあって金春流にない曲（〈恋重荷〉〈巻絹〉〈大原御幸〉〈胡蝶〉〈正尊〉〈鷺〉〈砧〉〈木賊〉〈檜垣〉〈伯母捨〉〈求塚〉〈雲林院〉）や番外曲〈実方〉〈長柄〉の復曲、新作能〈佐渡〉も手がける。カナダ、アメリカなど海外

Hosei University Repository

公演に参加。日本能楽会会長、能楽協会理事長などを歴任。平成二年(一九九〇)、勲四等瑞宝章を受章。著書に『動かぬ故に能という』『十人といろ』『花の翳』、共著に『能面入門』『井伊家能面百姿』『古能面傑作五十撰』など。

●片山慶次郎

シテ方観世流。8月17日、胃がんのため逝去。享年77。昭和7年10月4日、片山博通(八世九郎右衛門)と四世井上八千代(愛子)の次男として生まれる。幼少より父及び杉浦義朗に指導を受け、四歳で初舞台。長じては観世雅雪、観世寿夫に師事。「能にしたしむ会」主宰。兄・九世片山九郎右衛門(現・幽雪)を補佐し、同門の育成にあたる。能楽協会京都支部長、京都能楽会理事長などを歴任。京都市芸術文化協会賞、京都府文化賞功労賞、京都市芸術功労賞などを受賞。平成18年旭日双光章、観世寿夫記念法政大学能楽賞。著書に『博通追憶』、『四世井之上八千代芸話』『なんとのうええ　慶次郎雑談』など。

●泉泰孝

シテ方観世流。8月27日、食道がんのため逝去。享年79。昭和5年9月4日、泉泰一朗の三男として生まれる。父及び大槻十三、大槻秀夫に師事。〈翁〉〈石橋〉〈猩々乱〉〈道成寺〉〈安宅〉〈砧〉〈求塚〉〈望月〉〈恋重荷〉〈卒都婆小町〉〈木賊〉〈鷺〉などを披く。フランス、イギリス、ドイツ、中国など海外公演にも数多く参加。大槻能楽堂理事などを歴任。

●表章

能楽研究者。文学博士。法政大学名誉教授。野上記念法政大学能楽研究所元所長。9月6日、脳出血のため逝去。享年83。昭和2年4月26日、北海道生まれ。東京文理科大学卒業。26年から平成10年まで法政大学、同大能楽研究所に勤務し、世阿弥能楽論、能楽史を研究。五十年以上にわたり能楽研究を牽引し、常に新たな問題提起と発見を行ってきた。平成7年、角川源義賞。17年、瑞宝中綬章。21年、観世寿夫記念法政大学能楽賞。22年、日本学士院賞・恩賜賞を受賞。主な著書に岩波日本古典文学大系『謡曲集(上・下)』(共著)、『鴻山文庫本の研究』、『金春古伝書集成』(共著)、日本思想大系『世阿弥・禅竹』(共著)、『喜多流の成立と展開』、『大和猿楽史参究』など。前号を参照。

●若松健史

シテ方観世流。9月20日、出血性心不全のため逝去。享年75。昭和10年5月24日、若松宏守の長男として生まれる。26年、銕仙会入門。観世華雪、観世雅雪、観世寿夫、八世観世銕之亟に師事。同年〈経正〉で初シテ。35年〈石橋〉、36年〈猩々乱〉を披き、38年に独立。その後〈道成寺〉〈翁〉〈望月〉〈求塚〉〈恋重荷〉〈大原御幸〉〈卒都婆小町〉〈鷺〉〈姥捨〉を披く。「翠の会」「翠松会」を主宰。

●大河内俊輝

能楽評論家。11月19日、肺炎のため逝去。享年88。大正10年12月17日、東京に生まれる。昭和18年、明治大学卒業。戦後から能楽評論を行い、33年、演能公演組織「東京能楽鑑賞

Hosei University Repository

会」を企画発足、雑誌『能楽思潮』編集責任者となる。61年には「現代能楽」代表人となる。『撩乱の花―ある能役者の生涯』で昭和48年度芸術選奨文部大臣賞を受賞。他の著書に『能―我は我なり』『能狂い』など。

●茂山千之丞

狂言方大蔵流。12月4日、肝細胞がんのため逝去。享年87。大正12年10月14日、三世茂山千作の次男として生まれる。父及び二世千作に師事。昭和元年、〈以呂波〉で初舞台。21年、二世千之丞を襲名、以後〈三番三〉〈釣狐〉を披く。復曲・新作狂言の演出も多数。オペラの演出も手がける。能楽界のタブーを破って能楽師として初めてラジオ・ドラマに他ジャンルの俳優と共演、武智鉄二を中心とする新しい演劇運動に参画。山本安英主演『夕鶴』の与ひょう役を演じ続けるなど、多彩な芸能活動を展開。平成4年、観世寿夫記念法政大学能楽賞、7年、芸術祭賞演劇部門優秀賞、8年、芸術選奨文部大臣賞、10年、松尾芸能賞優秀賞を受賞。11年、紫綬褒章受章。著書に『狂言役者―ひねくれ半代記』『狂言じゃ、狂言じゃ！』など。

●野村万之介

狂言方和泉流。12月25日、肺炎のため逝去。享年71。昭和14年5月2日、六世野村万蔵の五男として生まれる。父に師事。19年〈鉢叩〉で初舞台。45年〈釣狐〉を披く。55年、芸術選奨文部大臣新人賞受賞。「万之介狂言の会」主宰。父から継承した洒脱な芸に、近年は独自の滋味を加え、高い芸境を示していた。「万作の会」の重要メンバーとして、古典・新作を問わず国内外の公演に多数参加。「まちがいの狂言」「敦atsushi―山月記・名人伝―」では、狂言の技術に立脚した飄逸かつ貫禄のある演技を見せた。

●寺井良雄

シテ方宝生流。12月30日、肝不全のため逝去。享年69。昭和16年1月9日、笛方森田流・寺井啓之の次男として生まれる。十七世宝生九郎重英及び十八世宝生英雄に師事。21年、宝生九郎に入門。22年、〈鞍馬天狗〉で初舞台。35年、〈禅師曾我〉で初シテ。以後〈翁〉千歳、〈石橋〉〈道成寺〉〈乱〉〈翁〉〈安宅〉〈鸚鵡小町〉〈大原御幸〉などを披く。ミュンヘン五輪能楽文化使節団、タイ能楽団、メキシコ通商百周年記念公演など海外公演に参加。龍宝会・良雲会・松雲会を主宰。全国各地で指導にあたる。相模女子大学客員教授、東京芸術大学音楽部講師、能楽協会常務理事、宝生会理事などを歴任。